

＝草津市矢倉小学校インタビュー＝

今回、草津市矢倉小学校 川崎文男校長先生に矢倉小学校の地域教育、総合学習などに関してお話をお聞きすることができました。以下は、その内容です。



2001年3月インタビュー

A：教育理念について

矢倉小学校の理念について

—まず、矢倉小の持っている教育理念というのはどういうものなのですか？

学校全体としての教育目標というのは、どこでも変わりはないのかもしれませんが、滋賀県が県の教育目標を立てまして、それを受けて本市流につくって、またそれを受けましてうちの学校がまた考えています。まあ、毎年変わるものでもないです。でも、教育目標なんて大きなことをいったって、子どもたちにはなかなか理解できません。特に小学校の子たちには。そういったものをイメージとして子どもたちに、キャッチコピーと言ったらそうかもしれないけど、合言葉のような形で出していくってことをしています。現在の本校のキャッチコピーは「心ほかほか、元気もりもり、矢倉の子」でして、前校長先生から作って頂いているものを気に入ってずっと使っています。（校長先生は平成12年度に矢倉小に赴任してこられました。）

教育理念と地域性の関係

—地域教育をとりいれようという動きがずっと変わらない学校の教育理念にどのように影響しているのですか

10年、20年昔の教育と今の教育との違いですね。むかしは、先生に「私が子どもを教育するんだ」という考え方が強かったですね。学校の先生が、教える。でも今はそうではなくて、学校の先生が教える、というのには変わりはないけれど、子どもを育ててくれるのは先生だけじゃない、地域の方もいますし、保護者の方ももちろんそうですし、いろんな人の手によって子どもが育てられていくんだ、という考え方になりましたね。私らも、あるパートを受け持っているんだ、という感じなんです。昔だったら、私だけがこの子を育ててると思っていましたけど。」その違いは大きいですね。教師自身の教育スタンスが変わった。スポーツ少年団やボーイスカウトなど、社会教育の中で子どもを育ててもらおうというのがありますし。昔は、割とそういうものは別のところにあるという考え方だったんですけどね。目標は同じ文字でかかれていても、考え方は変わっていると思います。昔だったら地域の人から電話がかかってきても、地域から文句を言われた、という風にとっていたこともありましたが、今は地域の方が子どものことを心配して電話してくださっている、という風に考えたり、学校と協調していくような態度の電話だったりします。そういう意味では、地域の方も学校側もスタンスが変わったんですね。

B：地域教育について

学校と地域の協力について

—学校と地域の方との協力が増えていったのですか。

そうですね。この学校でもそうです。普段の授業だとか、行事だとかに地域の方に参加して頂いて進んでいくのが増えましたね。写真を撮っても子どもの間に地域の方が写っているのが増えたり地域の方に参加していただく教育と今までのように先生が教科を教える教育が融合してきています。

—例えばどんなところに地域の方が参加されているんですか。

例えば、今までだったら子どものための種目で終始していた運動会に、地域の方々も参加してもらえるようなプログラムを作ったり、今まではフォークダンスとか流行の歌でやっていたレクリエーションダンスとかを地域の人と一緒にやれる民謡に変えたり、そういうことで地域の方と触れ合うこともできるし、地域にそういうものがあるって、そういう人がいるということを知ってもらえるし、また、地域の方も参加してもらうことで一緒にやったということを知ってもらえる。他には、社会科の時間に地域の昔の話をおじいさんおばあさんに来てもらって話してもらうとか、ですね。

国語、算数、理科、社会、いろんな教科があったり、また、クラブ活動とかもありますけど、どのジ

ジャンルだけ、とかではなくて、どこでも可能だと思うんです。例えば、国語で言うと、どの学年でも話の読み聞かせ、というのがあつたんです。何か話を勉強した後に、地域のお話会グループの方に、同じ作者の違う話を紹介してもらったりということも出来ますよね。普段聞いている教師の声ではなくて、どこかのお母さんかもしれないですけど、地域の方の声からお話を聞くことで、より深く聞けるかもしれない、ということが出来ます。社会なんかは必ず地域学習をしますから、住んでおられる方や歴史とか文化とかに関わった方に取材に行ったり、来て頂いたり、そういうことをすることで普段教師が教材を準備して教えることよりは非常に幅が広がった学習ができるし、同時に子どもたちにとつても、ものすごく新鮮ですよ。「いつもすれ違っているおじちゃんが、実はこんな昔の話知つてはんねんな、すごいんや」ということに驚く。それはこの地域も同時に高めていきたい、学校だけが教育を担うんじゃなくて、地域や家庭の皆さんも一緒に子どもを育てる大事な器なんだ、という、ちょうどこの学校の理念ですね。

しかも、このあたりの地域の方々も非常に学校に協力的でしたので、いろんな意味で支援をして頂いてましたから、地域協働合校という言葉が出る出ないに関わらず、事業として打ち出されまされたけど、非常にスムーズにスタートできたかなと思います。地域協働合校という言葉が市から出されたのは平成9年です。それから協力をしていただいた分もちろんありますけど、それ以前からも例えば老人クラブさんですとか、公民館の活動をされてる方ですとか、声をかければ気楽に来ていただけるという感じでした。また、逆に気楽に来ていただける学校にしていけないかな、と言うのは、私もそうですが、前の校長にもあつたと思います。

C : 総合的な学習の時間について

総合的な学習の時間と地域教育の関係

—平成14年度からの総合的な学習の時間の導入によって、今までの地域教育に何か変化はありますか。

今は教科という枠の中で授業をしていますが、総合的な学習の時間は各学校で課題を見つけてそれをやればいい。全国共通のこれをやりなさい、という課題ではありませんので。そうするとやっぱり、地域の周辺のことを調べたりすることも多くなりますので、今まで地域の人に協力してもらっていた関わりというのが生かされるのかな、と思います。

もう既に今年から以降に向けての時間を入れています。必ずと言っていいほど、何らかの形で地域の人との関わりをいれています。それなしでは、もう出来ないのです。そういった意味では、これまでこの学校で地域との関わりを作ってきたことがとても大きなベースとなっています。

例えば、今5年生で植物が育つには、どんな土がいいんだろう、土の中にはどんなものがあるのだろう、というテーマで、学習を進めています。お宮さんの土を取ってきたり、学校で残飯を肥料

に変えるものがあるんですけど、その土を取ってきたり、地域の方から畑の土をもらって来たりしています。それで、その土で大根が育つと言うことになると、大根はどう育つのかということになる。そうすると、大根作りをしている方に来ていただいて、お話していただく。そしてじゃあ、作ってみようかということになる。だから、子どもたちが課題を持ったときに、助けていただける、アドバイスをいただける方が、たくさんいらっしゃる。

まだまだきっと、私らの知らない方がたくさんいらっしゃると思うんです。学校まで来てわざわざそんなことするのはおこがましいと思っている人、特別な技能を持ってないと子どもたちに教えられないとまだ思っている人とか。そういう人に普段やっておられることでいいので教えてやってくださいとか、声を広げることで、多くの方に来ていただくことができる。まだその途中だと思うんですけどね。

6年生は卒業を前にしてるんですけども、将来の職業や職業観について考えようと言うことで、初めは自分の親のことを調べていたんですけど、ついこの間、大人の世界をのぞいてみたい、という希望が出てきて、担任が学校近辺の事業所ですとか商売屋さんで仕事を体験させていただくお願いに行きました。協力しようと言ってくださったところに子どもたちが2、3人のグループを組んで、1日9時から3時まで、仕事をさせてもらいに行きました。子どもですからもちろん大した仕事は出来ないんですけど、教師のいないところでそこにお任せして仕事させてもらったということがありました。子どもたちはやはり非常にそのことが新鮮だったし、こんなに仕事で大変なんだということを学んできたようですね。こういうことも地域の方が協力してくださらないと出来ないことです。商店の方でもまた機会があつたら声をかけてくださいとか、子どものこういう所をもっと鍛えたいとか、地域の方も学校を理解をしてくださったりしますからね。地域も学校も児童もみんな、それぞれの持分のところである種の学習ができたいと思うんですね。それが地域学習のいいところだと思います。

総合的な学習の時間のテーマ

—総合的な学習の時間のテーマは子どもさんのほうから出てくるんですか。

大きなテーマは学校で学年や担任が決めます。でも中身については、子どもたち個々ですね。それを同じような興味を持っての子たちをグループにさせたりとか、場合によってはクラスで取り組んだりとか。その中で、地域の人にこれを聞いてみようと言う声も児童の中から出てきます。今までだったら、教師が全部準備してましたから、自分が聞きに行ったことを児童に話して聞かせてたんですね。でも、それだったら地域の人に来てもらうか、児童が地域の人に聞きに行った方が、生の声が聞けるわけですから、いいですよ。そういう意味では学習のスタイルが変わってきました。教師は自分が教えるんじゃなくて、いかに地域の方にお話していただくか、いかに児童に地域の方のお話を聞かすかという、仕掛人にならなくてはいけなくなったんですね。

D : 地域協働合校について

地域協働合校と矢倉小学校の取り組みの関係

—地域協働合校という市の事業と矢倉小の地域教育の取り組みとはどういう関係にあるんですか。

多分、草津市の言っている地域協働合校というのは、一つの大きなまちづくりのビジョンだと思うんです。草津市の中には小学校が12校、中学校が6校あります。そして公民館もそれぞれの校区にあります。そういう地域の中で学校と公民館との関係も強めて、もっと地域の教育力を高めましようという考え方だと思います。それを実際に各学校で展開していく際に、矢倉小の場合は今までやってきたこととすんなり一致した部分はあります。そして、「ゆうゆうびとバンク」という生涯学習の人材バンクがありますが、それは、市として、地域教育を応援しますよ、というものです。うちの学校ももちろんそういうのを活用することもありますし、また逆に、以前からうちの学校に来ていただいていた方をバンクに紹介して、市の事業を厚みのあるものにするというのもあります。

4年生がごみの勉強を社会科の時間にしている、それを総合的に発展させたいなど思っていました。今まででしたらクリーンセンター見学には担任が学年の子どもたちをバスに乗せて連れて行って見せて、調べて、帰ってきてまとめて、という学習でした。しかし今回は、保護者の方にも声をかけ、更に広げて関心のある方誰でも来てください、というようにしたら、子ども70数名に対して保護者の方20名ばかり来ていただきました。保護者ではないけれども老人の方も2、3名来て下さったので今度はその方にも声をかけられるようになる。発掘の形というのは色々あると思います。草津市のバンクは専門性のある方がたくさん登録されていますけど、学校で求められている人材というのは必ずしもそういう方ばかりではなくて、普通のおじいちゃん、おばあちゃんでも活動していただけなので、もっともっと気楽に来ていただけたらというのがもっと学校を開いたものにしていけるということになるのではないかなと思います。特別な力がないと来れないようではまだまだだめかなと思いますので。

子どもにとっては地域の方は教えてもらう文化を持った人ということになりますよね。ところが、教育というのは例えばお父さんを大事にするとか、わがまま言わないで家族仲良く暮らすとか、そういう教科書に無い教育というのはいくらでもあるわけです。学校の中で友達との和とか仲間作りとかは道徳で学習するけども、例えば昼休み日向ぼっこしてるところで通りかかったおばあさんと世間話する中で、おばあさんの良さとか人間の良さとか言うものを感じ取ったり、おばあさんとお母さんどうしてるとか話すことによって、人間的な温かみや人間的なつながりを教えてもらえる。こういうものが地域協働合校の最終的な形だと思うんです。つまり、おじいちゃんでもおばあちゃんでも、特技が在るとか無いとかではなくて、人間的なふれあいをさせてもらう中で成長させてもらう

部分がある と思うんです。そういうことのためには、授業とか学校行事とかだけではなくて朝から晩まで、子どもたちが学校に来てから帰るまで、極端に行ったら学校にいつもおられていて出会ったら話すみたいな、そこまで出来たらいいなと思います。そのためにはもっと学校の精神的な敷居を低くしなくては いけませんよね。それとともに物理的な面では、地域の人が学校に来て、喫茶店じゃないですけど、お茶とお菓子は用意してますから好きな時間に来てしゃべっていただきますっていう場所がこれからは、いると思います。誰が入ってくるかわからんとかそういう心配の無い状況のためには地域との信頼関係も必要ですけどね。今都会の学校で生徒が少なくなって空いた教室とかをボランティアを入れた福祉施設にしているところもありますけど、私はそういう風に学校が一つの社会となるのがいい と思いますね。今までだったら学校には先生と子どもしかいなかったでしょ。でもそれがおじいちゃんもいるしおばあちゃんもいるし商売屋さんもいるし何世代もの人がいる、その中で子どもが自分の勉強をしていくというふうになるのと違うかな、と思います。

ただ、敷居を 低くしていくというのはどうしたらいいかな、と思いますのでそのあたりは地域の人ともっと話さなくては いけないなと思います。やっぱり学校に行ってやってる、という考え方になるとどうしても来ない人は来なくなってしまいます。それは子どもを育ててるという感覚ではないですよ。学校の中だけが地域協働合校 ではなくりますよね。家の前で子どもに出会ったときにほんの小さな声をかけてやることも教育ですよ。何も大きな看板を下げても地域協働合校と言わなくても ということを感じられたら、地域の教育力を高める、地域の人が子どもを育てる、というものになると思います。

昨日も今年最後のクラブ活動がありました。20 あるうち 8 つのクラブの中にボランティアの方が入ってくださってこの一年間子どもと一緒にやってきて下さいました。その中の一つに来てくれるおばあちゃんが話してくれたことなんですが、そのクラブを卒業してもう中学生になった子が、毎日そこを通るたびにおば ちゃん、おばちゃん、と声をかけてくれる、だからあなた達もクラブが終わっても声をかけてね、私も声をかけるから、とおっしゃっていました。そんな関係ってとても大事なかなと思います。そういう出会いを作らせて頂いているのもこの地域協働合校のおかげかなと思います。その他にも、6年生になると老人クラブの みなさんと年2回プランターの花を植えるんです。ふれあい活動という。そのときにいつも来てくださる方たちは何か特技があるわけではなく、クラブの一員やし声かけてもらったし行こうかみたいな感じできてくださってるんです。その中で、中学3年になった子が自分は公立高校に行きたかったのに私立に行くことになってしまったと、小学校のときに一緒に活動していたおじいさんに手紙を出したらいいんです。そしたらおじいさんは、どの学校を出るかではなくてその中で 自分がどんな風に頑張るかが大事だから、そこで一生懸命頑張ったらいんじゃないかと返事を書いたそうです。それから毎年年賀状をやり取りするようになって、今でも手紙が来て嬉しいですよとおじいさんが言ってくださいました。こんな風に、今やってすぐ芽が出てくるものもあればしばらくたってから芽が出てくるものもあるし、短期で見る成果と長期で見る成果と両方あるな、と思いました。特に身近な変化が子どもに見られるのは嬉しいんですけど、

長い目で見て子ども の中で育っていくというのは逆にすごく根付いて形に表れる以上に土台がしっかりしているような気がしますね。

一定期間来て頂くというのはそれっきりですけど、そうではなくてそれを一つのきっかけにしてそれが日常生活になってしまうようなね。そういう状況を私らは作っていききたいなと思っていますし、数増やすことでそれができるんじゃないかなと思いますね。

私が若い頃に地域の子ども会のお世話をさせていただいたことがありました。今はメンバーは皆40代とかですけど今でも彼らは、地域でお祭り事だとか仕事 があると「手伝ってくれへんか」って頼みやすいし私も「一緒にやったろか」って40代にもなったおじさんが行ってくれるのも有り難い。それに今は違う町に 行ってしまったメンバーも朝会ったらおはようございますって言うてくれるんですよ。それだけのことなんですけど、顔見知りって言うだけでつながりがある。地域協働合校というのもこれから繰り返されてそういう風に育っていきたくらうと思いますね。この小さな地域の中だけでなくて人間関係は市や他の市町村から来 ていただくことで広がるでしょうし。

—学校側から見て地域協働合校がこれから変わって行って欲しいところなどはありますか。

目先のことではあるかもしれませんが。例えば地域の方に社会の時間に地域の歴史をしゃべって欲しいと思うとしますね。そのときには何らかの打ち合わせをし なくてはならない。そうするとその時間を生み出さなくてはならないんですね。基本的に朝学校に来てから夕方5時に勤務が終わるまで、一日中子どもと一緒に いるわけですから、地域の人との話をいつするか。企画して仕掛けていくためにはそういう準備が必要なので。例えば、地域の方も自分の仕事が終わって帰って 来られると夜になりますから、当然こちらは勤務時間外ですね。今はそれぞれの先生が熱意を持ってやっていますが、遠くから通勤する職員とか幼い子どもを 持っている職員とかはなかなか大変ですよ。そういう時間的な面もこれからは考えなくてははいけませんね。今は幸いそういう問題は無いんですけど、来ていただ いたおじいちゃんが怪我されたらどうしようとか、その最中に子どもが怪我したらどうしようとかね。そういう意味では保険とかも必要になってきますよね。冷 たい話ですけど、安心してきてもらうためにはそういう話もおかなくてはならない。学校という一つの機関でやっている以上、表面的に出てくるものではないにしろ、整備しておかなくてはならないと思いますね。ボランティアやから善意やからということで解決できない問題が起こったときに備えてね。でも、もち ろんもっと根本的な問題もあって、おじいさんがちょっと学校に来てお茶を飲んでいけるような雰囲気を作って人間的なつながりが深まっていくことが大切なん ですよね。そうすればさっき言ったような保険のような問題はある程度クリアできると思うんです。怪我してもまあいいやって済ませられたり。ある意味で言う と今の社会になる以前の村落社会はそういうものだったと思うんですよ。保険が無くて、ガラス割れてもまあいいがなって信頼関係があるために許されてたっ ていうのがあった。それを今の社会でなあなあじゃなくて本当の意味の信頼関係で出来たらすごいなって思いますね。それを地域協働合校でできたらすごいな と。

さっきの事業所体験の時にも担任はあちこちをぐるぐる回って子どもたちが怪我してないか、迷惑かけてないか見て回ってたんですね。子どもが終わったから帰るって言ってもその帰り道が心配だったりしますし。だからそういうときには安全教育というのがまず必要ですね。どの道帰ってきたらいいかというのまで事前指導する必要があります。一つの授業の企画、実施まで先生がやるということですね。子どもたちがばらばらに出て行ったときには礼儀や交通安全も教えなきゃいけないでしょ。そしたらどこまでが社会科なのか道徳なのか分からなくなってきますけど、それ全部含めて社会学習でしょ。そういうところまで教師が企画していかななくてはいけないんですね。

E：これからの教育について

先生はコーディネーター

—そういう意味(先生が企画しなければならないということ)で先生が変わってきた点というのはあるんですか。

総合的な学習の時間を含めて、教科書が無い授業っていうのが出てきてますから、教師のほうにも意識改革なり、いろんなものを繋いでいながら授業をコーディネートする力というのが問われていると思いますね。今までの先生って言うと専門の教科をいかに分かりやすく生徒に教えるかというのが求められていたんですけど、いまはそれだけではなくて総合的な学習を仕掛けていったり地域を巻き込むためにいつもいろんなところから情報を仕入れていく、そしてどれが必要かというのを考えたり接点を見つけて子どもに伝えていったり工夫することが大事です。そういう意味で、今までと違った先生の仕事というのが出てきましたね。これから先生になる人にとってはそういうものが当たり前になってくるかもしれないですけど、古い私らはこんなこと夢にも思っなくて。私らの世代が変われるか、というのは重要ですね。今のパソコンもそうですよ。皆さんはパソコンはもう空気みたいなもんでしょ。でも、パソコンを一から勉強する私たちの世代にとってはいつまでも機械ですよ。そんな世代の違いはありますね。

先生と市の関係

—そういう先生に対するケアというのは市でもあるんですか。

総合的な時間はこういう風に展開していったらいいですよという、先進的な例で講師に話をさせていただくものはありますよ。いずれ教科チームみたいなものができるんですかね。でも難しいんですよ。いざ授業やるとなると学校によってテーマが違うので。他の学校がやってることをあーそうかって話を聞くことは出来ますけど、それをそのまま真似することは出来ませんからね。じゃあ

うちやったらどうなるかなという考え方しか出来ないですからね。逆に言ったらこれから先生になる方にそういうことを理解してからなっていていただくというのがいいでしょうね。私たちも35日間教育実習に行って算数の教え方とかを勉強しているじゃないですか。でも総合的な学習の時間とかは、他校でやったことがそのままこの学校で使えるというわけじゃないですから、新任の先生にとっても難しいと思いますね。

校内では、総合的な時間を研究の窓口にしていますので、各学年で授業をしてどうだったかというのでも吟味して、これからは自分の学年にどういうことを取り入れたらいいのかを考えて改良していく。それと地域の方に来ていただくときには朝の集会でみんなに情報をリアルタイムに流していたり、学年同士でどういう人をよんだらいいか相談しあったりしていますね。

F：その他

—他の地域もこのような取り組みをしたいと思ったときにどうやったら成功すると思いますか。

地域協働合校も今、国やいろいろなところで言われている「開かれた学校」というものの流れだと思います。こういうことが全国的に求められているというのを考えたらどこでもできると思いますよ。うちは市教育委員会がこういう事を提唱して進めていますけど、言ってみれば一つのまちづくりですよ。他府県でも形は違うけど学校を巻き込んだものはあると思いますよ。

—NPOなどに総合的な学習の時間を全て委託するというのはありえると思いますか。

そういうのがあるとありがたいでしょうね。さっきも言ったように学校だけでやっているという感覚がなくなってきましたし、地域といっても子どもを取り巻く大人ということですから、それが商店街の人であっていいでしょうしNPO団体であっていいと思うしね。要は子どもを取り巻く大人がそれぞれのところで子どもを育てていきましょうよ、学校もその一つですよ、という考え方であると思います。だからボランティアであれ何であれ関係ないと思います。先日も市のほうでNPOの交流のイベントがありましたけど、たくさん活動をアピールしてらっしゃいましたね。それを学校の側から見ると、ああ、おいしいなあ、この人たち学校に来てもらえると助かるなあって思うのもありましたね。いろんな方のお世話になって、子どもたちがいろんな世界を知るというのは大事ですので、そういう意味では貪欲になりたいですね。学校では算数でも足し算やって、引き算やって、掛け算やって、、、という風に系統だった順番がありますけど、実際われわれの頭の中ではそんなにちゃんと順番になっているわけではありません。応用を知ってから基礎を知り一連の知識を組み立てていくやり方もあるわけで、いろいろな人と出会うことで自分で整理整頓して作っていくという教育もできると思いますね。

—子どもを中心として大人同士がつながっていくというものもあるのですね。大人同士のつながりというものもあるんですか。

うちの場合は「矢倉学区地域協働合校を進める会」というのがあります。学校と地域の自治会の会長さんとかボランティアの方々とか集まって意見交換したり 情報を共有したり。あとは公民館とかで地域の活動をなさってますね。そこに学校も参加させてもらったり、ご案内いただいたりしています。そうやってどこかで接触を持って子どものこととお話させてもらっています。さっきおっしゃったように子どもを中心としていろんな大人が関わって地域の教育が成り立っている んです。それは物理的な地域という意味も子どもを取り巻く地域という意味もあります。

以上